

薬物乱用・依存の実態・病態把握と治療法の開発・普及

大規模疫学調査で我が国の薬物乱用・依存の現状を把握

- (1) 一般住民(15~64歳までの男女)の実態(2015年調査)
 - 薬物使用の生涯経験率(使用者人口):有機溶剤1.5%(約138万人)、大麻1.0%(約95万人)、覚せい剤0.5%(約50万人)、**危険ドラッグ0.3%(約31万人)**、コカイン0.1%(約12万人)、MDMA0.1%(約12万人)、いずれかの薬物2.4%(約223万人)
- (2) 青少年(12~15歳までの中学生)の実態(2014年調査)
 - 薬物使用の生涯経験率:有機溶剤0.7%、大麻0.2%、覚せい剤0.2%、**危険ドラッグ0.2%**、いずれかの薬物1.0%
- (3) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態(2014年調査)
 - 全薬物関連障害症例における「主たる薬物」の分布:覚せい剤42.2%、**危険ドラッグ23.7%**、睡眠薬・抗不安薬13.1%、有機溶剤5.7%、多剤5.4%、鎮咳剤3.2%、大麻2.4%、鎮痛薬1.5%

治療の質向上と均てん化

■認知行動療法プログラムの効果評価と普及

- ・ 初診後90日の治療継続率 ($p < 0.01$)
参加群 (92.3%) > 非参加群 (57.5%)
- ・ 自助グループ参加率 ($p < 0.05$)
参加群 (26.9%) > 非参加群 (9.7%)
- ・ 医療機関 (21箇所) 及び
保健・行政機関 (23箇所) で実施。
⇒ 保険医療の算定対象へ (H28~)。

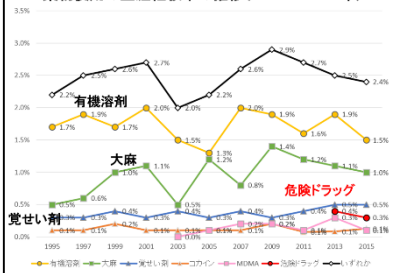


■家族心理教育プログラムの開発と普及

- ・ 基礎教材 (4種類) 及び
補強教材 (6種類) を作成。
- ・ 医療機関及び
精神保健福祉センター
(10箇所) で実施。



薬物使用の生涯経験率の推移(1995-2015年)



・ 対策立案・評価のための
現状把握調査研究

・ 病態解明のための
基礎研究
臨床研究

・ 治療法・治療システムの
開発と普及

新たな乱用薬物に対する対応

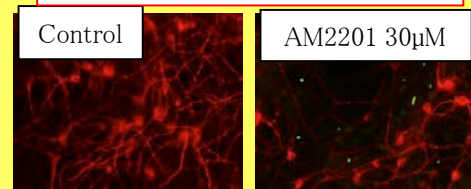
- ・ 疫学調査で明らかになった新たな乱用薬物について、
基礎研究(動物実験)により
 - ・ 「中枢神経系作用の評価」
 - ・ 「精神依存性の評価(CPP法)」
 - ・ 「細胞毒性評価」を実施し、
**法規制のための科学的データを
提供する。**

麻薬指定された例:
2C-T-7、2C-I、メロン
JWH-018、AM2201



CPP法: マウスはどちらを好むか?

細胞毒性(脳神経培養細胞)



Control

AM2201 30μM